下長小

ともに学び合い、考えを深める子どもの育成

（３年計画の３年次）
校長名　　宍戸　義彦

１　研究主題について

今年度、本校では「生き生きと輝く子」～思いやりのある子、すすんで勉強する子、体をきたえる子～を教育目標と努力目標に掲げ、それを具現化するために種々の教育活動を展開している。教育目標具現化のためには、基礎的な学習ルールを徹底させ、授業においてユニバーサルデザインの視点を取り入れ、児童の学習への意欲や主体性を高めることが大切であると考える。

昨年度、本校では、「ともに学び合い、考えを深める子どもの育成」という研究主題のもと、主にしかけやコーディネートなどの指導方法のあり方について研究した。教科を問わず、児童が課題解決したいと思えるしかけの工夫を授業で実践し、検証してきた。研究の成果として、しかけの工夫により、児童の課題解決への意欲が高まり、児童が問いや解決への見通しをもち、課題解決に向かうことができた。また、話合いの場面でヒントを言わせる、話合う内容を焦点化する、発問の工夫をするなど、教師がコーディネートを工夫することにより、児童の考えを深めることができた。書く活動を効果的に取り入れることにより、考えをもたせる手立てとして有効であることも検証された。さらに、「話す・聞く」表を教室に掲示したことは、普段の授業における話合いの指標となり、児童にとって共通理解しやすく、定期的な評価及び指導の改善を図ることができた。一方、課題として、全員が話合いに参加し、課題解決に向かうようにするために教師は、安心して学べる学級づくり、板書の工夫（視覚化）等を含めたファシリテーターになる必要があることが挙げられた。また、書く活動を工夫して取り入れることで、教師が児童の考えを把握していくことも大切であるとの意見も出された。

そこで、今年度は、「子どもが問いをもつしかけの工夫」「ファシリテーション・スキルを用いて、子どもの考えをつなぎながら話し合わせる工夫」について研究していく。教科を問わず、これらの工夫を実践することで、ともに学び合い、考えを深める子どもを育成することができると考える。

２　研究のねらい

ともに学び合い、考えを深める子どもの育成を目指して、しかけやファシリテーション・スキルなどの指導方法のあり方を授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

子どもが問いをもつしかけの工夫をしたり、ファシリテーション・スキルを用いて、子どもの考えをつなぎながら話し合わせる工夫をしたりすることで、ともに学び合い、考えを深める子どもを育成することができる。

４　研究内容

(1) 子どもが問いをもつしかけの工夫（授業の導入場面）
(2) ファシリテーション・スキルを用いて、子どもの考えをつなぎながら話し合わせる工夫（話合いの場面）

留意点・・・上記(1)(2)を進める上で次の点にも留意する。
ア　自分の考えを書く活動を取り入れること
イ　実態に応じて「話す・聞く」表を活用すること

５　研究の経過

⑴　研究仮設に基づく授業研究

月	日	授業研究
４	２７	研究仮説・研究内容・研究方法、校内研修年間計画、指導案形式についての共通理解
６	２９	第１回授業研究（６学年）授業者　三田史子教諭　国語「せんねんまんねん」
９	２１	第２回授業研究（要請訪問、４学年）授業者　寺澤麻美教諭　算数「割合」 （八戸市教育委員会　教育指導課副参事兼主任指導主事　日向端　聖　様）
１１	９	第３回授業研究（１学年）授業者　赤石彩教諭　国語「じどう車くらべ」
２	２２	今年度の研究のまとめ・来年度に向けての共通理解

⑵　一般研修

月	日	内容・講師・概要等
６	１	・一人一台端末活用研修（本校　川村　祐輝　教諭）
６	１５	・体育科における問題解決的な授業づくり （八戸市教育委員会　教育指導課主任指導主事　竹井　亮　様）
６	２２	・特別支援教育（スクールカウンセラー　石岡　れい子　様）
７	６	・Q-U 分析（こども支援センター　原　寿　様）
８	１９	・青森県小学校教育課程研究集会（資料研修）
８	３１	・青森県学習状況調査採点及び分析
１１	３０	・特別支援教育（本校　特別支援学級担任）
１	１２	・国語科における問題解決的な授業づくり （八戸市教育委員会　教育指導課主任指導主事　福田　秀貴　様） ・個別のケースから支援のあり方を共有する （こども支援センター　三浦　祐子　様、上澤　司　様、中川　由香利　様）

６　研究の成果

⑴　導入場面等において教師がしかけを工夫したことにより、子どもの思考に沿って問いが生まれ、課題解決に向けて意欲的に取り組む姿が見られた。また、自身の考えについて立場を表明させることで、子ども達の考えを焦点化させ、考え方を広げることができた。

⑵　互いに認め合う雰囲気の中で、教師の共感的・受容的な態度、つぶやきを拾う、問い返す、適切な復唱などのファシリテーション・スキルを用いることで、子どもの考えをつなぎながら話し合わせることができた。

⑶　書く活動を取り入れることにより、子どもの思考を整理したり、まとめたりすることができた。

⑷　「話す・聞く」表を指標にすることで、子ども達は共感しながら話を聞いたり、立場をはっきりさせて話したりすることができるようになってきた。

７　研究の課題

⑴　教師が教えたいことを中心に授業を行うのではなく、今後もしかけにより子どもが問いをもち、その問いを解決していく、問題解決的能力を高めていく授業を行うことが大切である。

⑵　教師や子ども同士の関わりの中で、子どもに参加感や達成感を味わわせるファシリテーション・スキルを今後も教師は高めていく必要がある。

⑶　ファシリテーション・スキルの検証がより明確になるように、教師は学習する子どもの視点に立ち、子どもの姿の変容を見ていく授業研究を行っていく必要がある。

⑷　「話す・聞く」表の内容が、使いこなせなかったり、学年によっては難しかったりしたため、その都度、見直しが必要である。

（記入者　寺澤麻美）